



豊橋市において露地ブドウを主体とした大規模の果樹経営で、作業の効率化や高品質生産に取り組む山本保一さんを紹介します。

ブドウ生産者としての歩み

山本さんは、豊橋市の果樹や畜産の複合経営農家に生まれ、昭和28年の追進農場（現・愛知県農業大学校）卒業と同時に、後継者として就農しました。就農後は持ち前の探求心を発揮して、新しい品目や技術に挑戦しながらモモやナシ等の栽培に取り組み、昭和55年頃にブドウを経営の中心とすることに決めました。理由は、①果実の生育期間が約3か月と比較的短く台風等にあうリスクが低いこと、②商品化率が高いこと、の2点に魅力を感じたからです。平成4年には、ブドウ105a、カキ61aを夫婦2人とパート4人で管理する、地域でも有数の大規模経営者となり、86歳になった現在も経営面積を維持しています。



山本保一さん

作業の効率化と高品質生産の両立

広い栽培面積を管理するために、徹底して作業の効率化を進めています。取組の1つとして、平成14年から、平行整枝短梢せん定を取り入れ、作業の平易化と作業動線の単純化をしました。その結果、体力面も精神面も余裕が生まれたため、栽培や雇用等、経営の状況を今まで以上に把握できるようになりました。また、本人だけでなくパートの作業効率が向上したことに加え、作業の進行状況がわかりやすくなったため、的確な指示ができるようになりました。



平行整枝短梢せん定の導入ほ場

さらに、効率化と同時にブドウの品質向上にも努めており、出荷物の秀品率は8割を超えています。それは、丁寧な栽培管理に加えて、環状剥皮等の着色向上の技術を取り入れることで支えられています。最近では、「平成29年度あいちのぶどうコンテスト」で特選に選ばれており、地域を越えて高い評価を得ています。

安定した生産を実現するための工夫

安定した生産のために、様々な技術の駆使に併せて情報の蓄積にも努めています。「いいブドウをつくるには、観察が最も大切である」という信念のもと、毎日ブドウの様子を観察し、作業日誌に記録し、過去の日誌と照らし合わせ、その年の天候や樹の状態に合わせた管理を実践しています。これにより、露地栽培にも関わらず、天候による影響を最小限に抑えて、毎年目標どおりの収量を確保しています。

また、消費者ニーズについても敏感です。農協の直売所における消費者の評判を参考に、平成23年から「クイーンニーナ」、平成25年から「シャインマスカット」を地域に先駆けて導入しました。

こうした姿勢で経営に取り組んできた実績が評価され、平成28年度の第18回全国果樹技術・経営コンクールにおいて、全国農業協同組合中央会会長賞を受賞しました。



主力の「巨峰」(左)と人気の品種「クイーンニーナ」(中)、「シャインマスカット」(右)

技術・経験を惜しみなく伝える姿勢

産地の技術力強化に積極的で、部会の講習会や情報交換会に参加し、導入した品種や技術の情報を惜しみなく公開しています。JAや農業改良普及課との協力にも前向きで、実証した調査研究等の成果が、山本さんを起点に産地に普及することも多くあります。

山本さんは、「産地というのは、みんなでレベルアップしていくものだと思う。自分の経験を伝えることで、ここまで支えてくれた産地に少しでも恩返しをしたい。」と語っていました。このような姿勢が、他の生産者の見本になっています。



地域の生産者と話し合う山本さん

まだまだ先を目指す熱意

山本さんは今後も改植を計画しており、人気が高い品種への更新を続けています。高齢にも関わらず、先を目指す原動力を伺うと、「ブドウが好きだから」と答えてくれました。その力強い言葉から、ブドウ経営に対する熱意が伝わってきました。

執筆：農業経営課

取材協力：東三河農林水産事務所農業改良普及課